



# 民進党

## 号外 静岡3区版

平成29年9月20日

民進党 民進プレス編集部  
〒100-0014  
東京都千代田区永田町1-11-1  
電話03-3595-9988(代表)  
press@dpj.or.jp  
https://www.minshin.jp

# 明日の日本 生活が第一

### 静岡県第3区総支部版

民進党静岡県第3区総支部 総支部長 小山展弘  
〒438-0078 静岡県磐田市中泉656-1  
電話 0538-39-1234・FAX 0538-39-1235  
e-mail : n\_koyama@aroma.ocn.ne.jp

## 衆議院議員 民進党静岡県第3区総支部長

こやま 展弘

# 小山のぶひろ氏に聞く



### 報徳立国・日本を創るう!

**Q** 中東遠地域には、二宮尊徳の「報徳思想」が現代も息づいていますが。現代の我々が二宮尊徳にどのようなところを学ぶべきでしょうか。

**A** 幕末の農村復興に活躍した二宮尊徳が、自らの教えを108文字にまとめたという「報徳訓」は、「自分さえよければよい」という独りよがりや戒めています。また、「田畑山林は人民の勤耕にあり」と説いています。これは「田畑の実りや山林の恵みは、人々が真面目に働くためだ」という意味です。大日本報徳社社長の榎村純一先生は、「田畑の实りや山林の恵みは殿様や武士のおかげ」と考えるのが常識の時代に画期的な主張をした」とおっしゃっています。翻って現代、「会社は株主のためだけのものだ。配当を増やせ」と主張する学者や評論家がいま「もの言う株主」から送り込まれた経営者が、株主への配当を増やすために、リストラを行い、施設は事業を売却し、短期的な利益をあげようとするケースすらあります。株主の役割を決して否定しませんが、「会社の利益は社員の勤労にあり」という尊徳を源流とした日本の経営を再評価すべきだと思います。

安倍総理は、日本経済について、これまで良いとされてきた経済指標については「アベノミクス」なるものによって結果が出たと主張してきました。しかしながら、株や為替は、世界経済や国際金融の動向が良い環境にあったことが要因で経済指標の数値がよくなったとも考えられます。二宮尊徳風に言えば「日本の繁栄は国民の勤労にあり」というように、いかに実質賃金を増やし、いかに国民所得を増やし、日本経済の60%近くを占める個人消費を伸ばすことを考えていかなければなりません。安倍総理は金融緩和を行いました。資金は日銀当座預金に滞留し、マイナス金利まで導入しましたが、なかなか市中に回りません。人口減少や高齢化の影響に加えて、産業政策とセットで行われなかったのが、日本国内の資金需要そのものが旺盛ではないのです。マイナス金利の弊害も出始め、金融システムは不安定になりつつあります。マイナスイナス金利政策を転換するとともに、貯蓄過剰の国内から海外の資金需要に応じる仕組みを、とりわけ地域金融機関を対象として設立する必要があります。信金中金や農林中金のような地銀中金の設立も一案でしょう。今後、金融検査マニュアルの改訂も検討されていますが、改定の内容によっては金融システムのさらなる不安定化も懸念されます。

二宮尊徳は、それぞれの長所や美点を活かし、伸ばし、徳に対して徳を以って報いる「報徳」、分限に合わせて節約を求めると同時に余剰については助け合いのために互いに供するべきとした「分度・推譲」など、様々な言葉や農村復興の仕法を残しています。

それらは、財政再建や人口減少対策、マーケットの縮小などの現代日本の様々な問題に対する解決のヒントを与えているように思います。二宮尊徳の報徳思想を活かす一つ、一人一人が生かされる、役割と生きがいを持つて生きることができる共生の社会、「報徳立国・日本」を目指していきたいと思っています。

**Q** どのような国会論戦を考えていますか？

**A** 品格ある国会での議論を行っていかなくてはなりません。国会での質問の際には、内容については鋭く、しっかりと尋ねなければなりません。しかし、「鬼の首でも獲ったような」相手を一方的にののしるような尋ね方はすべきではありません。礼儀と節度を保ち、常識的な姿勢であるべきです。私は今年の臨時国会では予算委員会に配属となりましたが、追及は2〜3割程度にとどめ、政策論争こそ7〜8割は政策論争を行うべきだと思えます。TV中継のない他の常任委員会での質疑は概ね政策論争中心ですが、予算委員会でも政策論争中心の質疑になるように努力すべきだと思います。

**Q** 「保守」や「保守政治」についてどのような認識を持っていますか？

**A** 「保守」にはいろいろな定義があります。ある人は伝統・文化を守ることに認識し、ある人は市場原理や競争原理を政府の介入から守ることを保守と認識します。ある与党議員は「土着の保守とイデオロギーの保守がある」と分類していましたが、この分類には私も共感します。土着の保守・現場からの保守の姿勢とは、理論理屈や主義にとらわれず、現場にあって最も適合する政策を行うおうとする姿勢（その際に伝統や文化といったものも考慮して生かす）であり、現行制度の良い部分も評価することではないかと思っています。

何を「保守」すべきなのか。私は70年間の平和と経済的繁栄を築いてきた、戦後の価値や現在でも機能している仕組みこそ、再評価し、「保守」すべきではないかと考えています。戦後のはなく、むしろうまく機能してきたものについては評価したうえで、時代に合わない部分については修正をしていくという姿勢こそ求められていないかと思っています。そのような「改革」「修正」の姿勢こそ、エドモンドバーク以来の、本来の「保守」の政治姿勢ではないかと思えます。私はこれを「現場からの保守」の姿勢と申し上げたいと思います。そして、今、まさにこの「現場からの保守」の姿勢に基づき、人口減少やマーケットの縮小、財政再建といった問題に、正直かつ着実に向き合っていくべきであると思っています。

